

上條央彦著 データ・ベース・システム

(産業図書, —コンピューティング・サイエンス・シリーズ—, 180ページ, 1250円)

仲 沢 洋 子†

本書では、特にシステム設計者の立場からデータ・ベースを取扱っている。実際には、第1章から第5章にかけて、それぞれ次の内容で構成されている。

- データ・ベース・システムの必要性と歴史
- 適用業務に対するデータ・ベース・システム設計の基本
- 従来のオペレーティング・システムの紹介
- データ・ベースの基本項目と、既存のデータ・ベース・システムの紹介
- データ・ベース・システムの運用面、及び今後の発展方向

このように、単に狭義のデータ・ベースだけをとらえるのではなく、データ・ベース・システムとしてこれを支えるあらゆる要因に対し、システム設計者として当然知っておくべき事項を豊富に折り込んでいる。

もちろん、再三、著者が強調する通り、まだデータ・ベース・システムは完全に固定化された段階ではない。しかし、将来のデータ・ベース・システムの進む方向をとらえるためには、現段階までの、その発展の方向、問題点等を正確に理解することが不可欠であろう。この意味で、本書は比較的小コンパクトにデータ・ベースに関するあらゆる現状を紹介しているため、システム設計者に限らず、興味ある多くの人が、既存の知識を再整理する上でも手頃な本になると思われる。

さて、個々の内容はさておき、本書を通して次の点に気づいた。

第1に、データ・ベース・システムの設計上、必要

となる基本項目を論じていく際、単にそれらを羅列するのではなく、すべて例を通して、なぜそれらが必要なのかを示しながら、自然に引き出している。

第2に、既存のデータ・ベース・システムを紹介する際にも、単に並列に列挙するだけではなく、各々の特徴、互いの比較を折り込んでいる。

第3に、例や図が豊富であり、それらは比較的単純化されてはいるが、技法に新鮮味をもたせており、一方で、日頃の適用業務を取りあげているため、読者に十分な実感を与えている。例えば、在庫問合せの場合、端末のスクリーン上での状態変化を通して、システムの動きを理解させている。

第4に、敢て著者は明記していないが、本書の背景には、IBM 10年の技術発展の歴史が顕著に現われている。従って、360/OSの概念そのものに親しんできた人々は、もう一度その全体を外側から見直すことができるであろう。また、既存の回線を使用したシステム(RJE~TCAM)に親しんできた人々は、端末利用の意義を再度考慮し直すことができるであろう。さらに、データ・ベース・システムそのもの(古くは、PICR, BOMP~GIS, IMS)に親しんできた人々は、それらの流れを振り返り、他のデータ・ベース・システムとの比較を通して、それらの特徴をとらえ、今後の進展方向を探ることができるであろう。

第5に、これは、不満でもあるが、ファイルの記憶媒体(磁気ディスク、磁気テープ等)のかなり詳細な説明に、貴重な数ページを費している点は、多少改善されてよいかとも思われる。

† (株) ソーシャル・サイエンス・ラボラトリ開発部